



婦人と子ども

第六卷第五號

子供と春の自然界

人は自分に似たものが好きなのですが、子供も同じ様に、自分に似たものが好きです。三歳位の子供にして見ても、大人に遊ばして貰ふよりは、同じ年頃の子供と遊びたがる。そこで、かの昔話が好きなのも、この道理で、昔話は人類の幼稚の時代、即ち未開時代の作で、昔話には、人類の幼年時代の思想が顯はれて居るから、そこで、その昔話が子供に好かれるのだ。つまり子供が昔話を聞くのは、自分の物語を聞いて居る様な譯なものだから、夫で昔話が子供に歓迎されるのだといった人があります。

山も森も河も海も、世界のすべてが笑つて居るといふ、一年中の今時を、詩人は年の少年時代といつて居ますが、まことに春の自然の愛らしい姿は、子供の天真爛漫の姿とよく似て居ます。こういふ所から、夏は身體もぐんにやりとなり、冬は小さく縮み込んで居た子供らは、春になると、丁度花の様に、鳥の様に「そら僕らの世界が来たぞ」と言はぬ許りに活潑にはれ廻ります。これも、一つは子供自分に似たものが好きだといふ所からでありませう。自然界に子供を遊ばせるといふことは、たゞ身體を健康にする許りで、はなから、實に人間の嗜好を高尚にし、延いて人生の殺風景を調和させることにならるのですが、これをなすには、實に今日の自然界が最上であります。自然が人間に與へた中にも、特に子供の世界として與へられた今日の自然界と、少くとも一日數時間は、子供等を友達として遊ばせたいものでありませぬか

(牧羊)